会議録

名　称　平塚市立小学校及び中学校適正規模等基本方針検討委員会（第４回）

日　時	**場　所**
令和７年８月２０日（水） 午後１時３０分から午後４時１５分まで	平塚市美術館ミュージアムホール

出席者

委員７人（山﨑委員、湯川委員、吉田委員、伊澤委員、工藤委員、木村委員、二見委員）

事務局１０人（教育総務部長、学校教育部長、社会教育部長、教育総務部教育総務課長、教育施設課長、学校教育部学務課長、教育指導課長、社会教育部中央公民館長、教育総務部教育総務課企画担当課長代理、企画担当１人）

１　開会

２　傍聴者の確認

＜委員長＞

本日の傍聴希望者の有無について、事務局に確認したところ、本日の傍聴希望者はいない。

４　議題

（１）平塚市立小学校及び中学校適正規模等基本方針（修正たたき台）

＜事務局＞

資料１の第１章「概要」について、説明した。

＜委員＞

１ページの概要について、上から４番目の段落に、「検討委員会、アンケート、パブリックコメントを経て作成されました」という一文を追加すると、公正公平に作成されたことが分かりやすくなる。

＜委員長＞

この内容は、教育長挨拶に入るのか。

＜事務局＞

まだ作成していないが、他の計画では、「ご意見いただきありがとうございます」といった感謝を述べるケースもあるので、ご意見を踏まえて追加する箇所を検討する。

＜委員長＞

最初の方に記述した方が、スムーズに理解してもらえるかもしれない。

＜委員＞

段落の順番を変えた方が良い。新しい時代に向けてより良い教育体制を構築していく必要があるが、足元には老朽化や人口減少などの問題もあることから、それらを踏まえて考えていく方が良い。「未来に夢のある平塚市が、老朽化や人口減少といった諸問題をクリアしながら教育体制を構築し

ていく」という記述の方が、現在の問題から将来への展望が自然に繋がる。現在の問題を先に記述することで、平塚市が抱える課題と、それに対する取組を理解してもらえる。５段落目を最初に持ってきた方が良い。
＜委員＞
まず３段落目の全国的な状況を最初に記述し、平塚市でも同じように２段落目の平塚市の人口減少、１段落目の校舎の老朽化といった問題があることを記述し、最後に５段落目の平塚市の目指す方向性を記述する方が自然だと思う。
＜委員＞
策定趣旨の目的語がすべて子どもになっている印象を受けた。12 ページに地域との関わりの視点を入れてあるので、子どもだけでなく地域にも配慮して策定したという記述を入れると、より優しくなる。
＜委員長＞
様々な関係者を視野に入れるというご意見である。事務局も同様のニュアンスで捉えているか。
＜事務局＞
お示しした内容から大きく変えず順番を入れ替えるとともに、地域に関する記述を追加したい。
＜委員長＞
文脈を整理し直すようお願いする。

＜事務局＞
第２章「市立小学校及び中学校を取り巻く現状と課題」について、説明した。
＜委員長＞
４ページの赤字部分、特別支援教育について増加傾向にあると記載されているが、増加傾向にあることの説明だけでなく、それに対する課題についても触れた方が良い。
＜事務局＞
一般的に児童・生徒数が減ると学級数も減り、教室の必要数も減少するが、特別支援学級が増加しているので、一定の教室数を確保する必要がある。記述する内容を検討する。
＜委員長＞
課題があり、様々な取組が必要であるというニュアンスで記述するべきである。
＜委員＞
専門的なスキルを持つ教員の確保、子どもの多様性に対応できる先生が必要であることを付け加えた上で、教室数の増加についても言及しても良く、これは子どもの教育に向けて、という文言も加えても良い。
＜委員長＞
教育と施設の両面から対策が必要であるというニュアンスで、問題提起をすると良い。
＜委員＞
細かい点だが、４ページのグラフと他のグラフの書式が異なるので、ビジュアルの一貫性を図るため、書式を揃えた方が良い
＜委員長＞
後段のメリット・デメリットについては、前回説明済みだが、最終的な基本方針の答申という意

味でも、再度内容を確認して頂きたい。改修にかかるコストについて、円グラフなどビジュアルのイメージはいかがか。
＜事務局＞
現在計算中のため、デザインは未定である。長寿命化と建て替え、それぞれにかかるコストを入れたいと考えており、デザインは今後検討する。
＜委員長＞
特に学校教育施設の場合、費用は重要な問題である。これだけ費用がかかるという形で独立した資料として掲載するのか。
＜事務局＞
ハード面に特化した形で提示したい。
＜委員長＞
学校施設再編の場合、土地売却などによる資金の話があり、費用と教育効果に関する議論が必ず起こる。市民も保護者も、費用と教育の両立について必ず議論することから、費用については、きちんと扱わなければならない。特に学校教育施設の場合、その点が難しいところのため、慎重に検討する必要がある。
＜委員＞
現状と課題の記述が学校施設に偏っており、「学校施設を取り巻く現状と課題」ではなく、家庭環境など多様な要因を含む「児童の教育を取り巻く現状と課題」とするべきである。また、地域との連携も不足している。
費用は必要だが、捻出方法だけでなく、市民への説明と教育への投資に対する理解を得ることが重要である。費用ばかりに焦点が当たると、市民に負担感を与え、教育の重要性が軽視される可能性がある。冒頭にこれからの教育のあり方について記述し、平塚市の事例についても、費用だけでなく児童の未来への展望を示す必要がある。ハード面への偏りを修正し、費用と教育の両面をバランス良く論じるべきである。
＜委員長＞
第２章のタイトルは「小学校・中学校を取り巻く現状と課題」であり、施設に特化した章ではない。学校規模の話やメリット・デメリットなども記載されており、費用については後述するとのことである。教育と施設を取り巻く現状と課題、あるいは教育に特化した方が良いというご意見か。
＜委員＞
学校運営協議会に参加しており、多くの課題を抱えていることを前回お話しした。教育環境や地域、家庭を含め、適正規模・適正配置を考える際に考慮すべき要素である。第３章にそのような要素を含め、方針を決定し、パブリックコメントを実施するという流れを作る必要がある。予算やハード面ばかりに目が行ってしまうと、教員の負担増などにつながってしまう可能性がある。
児童の教育環境は、ハード面やクラス数だけではない。学校運営協議会の資料にも記載がある。
＜委員長＞
第３章の話にも触れられたので、各章の内容について確認しながら進めたい。ここでは第２章をどうすれば良いと考えているのか、ご意見を伺いたい。
＜委員＞
児童の教育環境改善のためには、校舎・クラス数・通学距離といったハード面に加え、家庭環境等

の課題解決が不可欠である。学校運営協議会は、学校・家庭だけでは解決できない問題に取り組むために設立された。費用の課題があり目が行きがちだが、教育への投資という視点が重要である。ハード面、費用、負担感といった面が議論されがちで、児童の未来を見据えた教育議論が不足している。費用は手段であり、その捻出方法は別途検討すべき。教育のあり方全体を冒頭で述べるべきである。

＜委員長＞

どこをどのようにすべきか、明確にご提案いただきたい。

＜委員＞

児童を取り巻く環境は様々で、学校運営協議会の資料を参考に、学校の適正規模・適正配置を考える必要がある。ハード面や予算面に偏っており、費用で教育を決めていると誤解される可能性がある。小田原市、座間市、藤沢市の資料は「適正規模・適正配置」を明記し、地域や児童中心に記述されている。児童を取り巻く環境変化、地域社会の変化、学校の老朽化などを考慮した上で、適正規模・適正配置を検討する必要があり、より児童と地域に焦点を当てた議論が不足している。

＜委員＞

この資料の構成は第１、２、３章で序破急になっており、第２章は客観的な状況、数値や規模などを書かざるを得ない。第３章で理念や思想に近い話をすれば、構成を崩すことなく思いも込められる。学校運営協議会やコミュニティスクールの話は、地域との関わりが強いので、12 ページに記載すると思いを込められるだろう。

＜委員長＞

第２章は現状の話で、基本方針の肝となる部分は第３章である。適正規模・適正配置を考える上で、環境論などを含めるべきというご意見であれば、第３章で問題提起し、課題があれば第４章の実施計画として検討することも考えるがいかがか。

＜委員＞

構成は後で考えれば良く、市民にとって分かりやすい構成にするべきである。構成要素として何を入れれば良いかが重要で、第２章に入れても良いし、第３章に入れても良いと思う。第２章のタイトルが「小学校・中学校を取り巻く現状と課題」であり、学校のハード面やクラス数に特化した課題になっているので、教育はもっと幅が広いと思った。

＜委員長＞

今のご意見は、第２章について、最初に学校規模や推計の内容が入るのではなく、冒頭にこれらに代わる問題提起をしたうえで、各論を展開するということか。また、第３章に教育環境、施設だけではない様々な問題を含めて提起をして、それを後で論として展開するという意見であれば、新たな節を設けたらどうかという提案と理解する。第２章に問題提起が必要という趣旨か。

＜委員＞

構成要素として、他にも問題や課題があることをどこかに入っていれば良く、配置する場所は任せる。

＜委員＞

非常に難しい意見で、増やしすぎるとぼやけてしまう。この委員会は、適正規模・適正配置に関する委員会のため、第２章で学校規模について書かざるを得ない。通学を考えると、施設についても言及せざるを得ない。学区を示す８ページの資料や９ページの内容も入れる必要がある。市民が見

ると理想ばかりだけでなく、費用がかかるという現実的な話を分かりやすく入れる必要があり、市の財政状況や収入も示すべきである。今のご意見は、11 ページ「４　学校を取り巻く環境」に入れたら良い。

ただ、11 ページに違和感があり、全て国の課題を記載しているが、本来は国の課題を述べ、平塚市の状況を示すべきである。また、感染症のことよりも、熱中症対策や避難所などを記載したらどうか。平塚市の状況に合わせて修正することで、先ほどのご意見も盛り込めるが、増やしすぎるとおかしくなる可能性もある。

＜委員長＞

今のご意見は、「学校を取り巻く課題」として、「環境」というキーワードを加えるべきではないかということで、環境に広げると、広がりすぎる可能性もある。ハード・ソフト両面、感染症なども含めた対応策だが、保健性や安全性といった教室環境なども含め 11 ページに記述すると、文量は増える。先ほどの学校運営協議会の議論なども含めるといった意見は、この部分に入れる案もあるだろう。ただし、文部科学省の課題と平塚市の課題にはギャップがあるように感じており、平塚らしさと課題をどう対応していくのか、ストーリーが欲しい。

＜委員＞

11 ページについて、今まで市中心で考えてきたが、ここで全国的な課題に視点が移っており、実際の平塚市の学校現場と離れている。地域と学校の繋がりを考えると、地域から見た学校のあり方という視点を入れる必要がある。先日の津波警報が出たときは、やはり地域、学校、子どもたちと、７番のところで指摘されたが、その安全対策など全体を見ていく必要があることを痛感した。また子どもたちを地域で育てるというのも学校現場として感じているところがあり、地域の力なくしては、学校運営できないことから、これをつなげられるように、表現を変えると良い。

＜委員＞

第３章の説明はこれからだが、基本的な考え方の赤の加筆された部分が、児童・生徒の教育環境の充実の視点となっており、環境がここに入っている。先ほどご提案いただいたように、第３章の環境に関する部分を第２章で問題提起をしたらどうか。

今のご意見については 12 ページ「（２）地域との関わりの視点」に大括りとしては入っている。これを分解して、その視点の課題の部分を第２章に、これに関する考え方を第３章に持ってくると良いと考える。

＜委員長＞

今のニュアンスで考えると第２章に、文部科学省の挙げる課題を平塚市の形で展開をしていく中で、学校運営協議会の話も含めて、少しここで課題を列挙して、適正規模・適正配置を論じていくというストーリーになるのだろうか。

＜委員＞

どういう流れで第３章に持っていくか考えると、その判断の基準となるものが大事だと思う。第３章で適正規模・適正配置の考え方を持っていく流れを作るには、ちゃんと平塚市の課題が入っているとか、平塚市をこうしていきたいっていうのが入っていれば良い。

＜委員長＞

第２章と第３章のストーリー、繋ぎの部分が課題となる。第３章の説明がこれからなので、事務局の説明後、また意見いただく。

＜事務局＞
第３章「適正規模・適正配置の考え方」のうち、15 ページまでについて、説明した。
＜委員長＞
この第３章がメインとなると思う。新たに追加された共創空間はコモンのようなニュアンスで言葉になじみがない方もいるかもしれないが、ラーニングコモンズやスクールコモンズなど、近年話題になっている概念も含め、新しい空間を適正規模・適正配置の中で考えていく必要があると捉えている。
＜委員＞
15 ページの写真について、ハード面が整った事例として挙げられているが、校舎の更新によってコミュニティがどのように活性化し、独創的なものが生まれるのか。相模小学校ではフードバンクとの連携などに取り組んでいると思うが、ハード面による変化がソフト面にも良い影響を与える可能性があると考えることから、ソフト面の活性化についても記述されると良い。
＜委員長＞
「未来の礎を築く」という学校のイメージを、ハードとソフト両面を含めたダイヤグラムや曼荼羅図のようなもので表現できれば、イメージしやすくなる。施設の状況、使われ方、楽しさをどのように伝えるかも重要で、学習の場面など、どのように良くなっているかを表現することが重要で、皆さんが一番知りたい点だと思う。現状を示すのも良いが、改善できる余地がある。
＜委員＞
14 ページと 15 ページは具体性が少ない。相模小学校の新しい校舎学校の写真だけでなく、ＩＣＴ活用事例や避難所など地域との連携事例などを掲載、ビジュアル化して、新しい学校を作った時に理想とする共創が伝わると良い。
＜委員長＞
具体的な活動内容を、ＣＧや写真など様々な要素を組み合わせた図で表現し、ハードとソフト両面を含めたイメージを示せると良い。
＜委員＞
相模小学校の３つの特色を記載すると分かりやすくなり、基本的な考え方と結び付けることができる。他校での実践例やこの場所で実践することなどを示すことで、未来に進むイメージができるような紙面になると良い。
＜委員長＞
13 ページの文部科学省「ミラメクー未来の羅針盤」を平塚版として、より具体的な場面を加えたイメージ図やダイヤグラムを作成できると良い。また、相模小学校の３つの特色を盛り込むと良い。
＜委員＞
小田原市の例を参考に、地域の声を反映した明確な方針を示すべきである。学級規模に議論が偏っている点を危惧しており、小田原市のように、学校づくり基本方針を学校における学び、地域と学校の関係、学校のマネジメント、学校規模と配置の４点で明確化した基本方針を作成した方がよい。平塚市らしさを明確にしたビジョンと、それを実現するための戦略、そして予算、施設整備などの戦術を具体的に示すべきで、学級数や通学距離ばかりではなく、何を基準とするべきかの議論が不足している。今後の方針を明確に示すことで、将来の組織が変わってもブレることはない。

＜委員長＞
他の自治体の良い点を参考に取り入れるだけでなく、平塚市の基本方針の中で肝になる部分、他の自治体に対して参考となるようなモデルを生き生きと書き込めると良い。必要条件として書かなければならない内容もあるが、相模小学校の事例紹介だけでなく、平塚市の一番の見せどころのようなものが入ってくるべきである。第３章に移るところで、第２章で提起された課題が全て集約されているようなまとめを入れるという考え方もあるかもしれない。
＜委員＞
15 ページがＴＨＥ平塚のようなページだと思う。意見が出ていた美しいビジュアルを作る難しさもある。相模小学校の３つの特色を示さないと、美しい施設の写真を見せただけで終わってしまう。先ほど意見が出ていたが、児童・生徒がそこで生き生きと学べるためにこの場所を作り、地域との関わり、或いは防災も含めてこのような形になっているなどを示した方がよい。日本全国の美しい事例を幾つも並べて夢物語となるよりも、社会教育活動などで使われている場面や何か工夫した部分、或いは環境に関して太陽光発電など、平塚市民の方たちが、こうなったらいいよねと思うようなケースとして写真を掲載できると、平塚が教育に力を入れているまちであることが伝えられるだろう。美しい絵が書けないとしたら、15 ページ目の記述で平塚市の魅力を十分に伝えたらどうか。
＜委員＞
学校やＰＴＡの様々な取組を写真や事例を用いて紹介することで、平塚らしさを効果的に示すことができる。
＜委員＞
小田原市の方針に平塚市を当てはめて考えると良い。地域の要素が弱く、子どもの教育に特化しすぎているため、地域の部分を取り入れ、平塚市特有の要素をどんどん盛り込んだらどうか。
＜委員長＞
望ましい共創空間について、現場の状況を伺いたい。以前は大学で盛んだったアクティブラーニングの考え方が、小学校・中学校にも浸透しつつある。建築設計の提案においても、「この学校でアクティブラーニングは可能か」という質問をよくする。児童・生徒が主体的に学習場所やメディアを選んで展開するようなアクティブラーニングできる環境が整備されているかどうか、設計者側に確認することが多いが、その概念を理解していない設計者も少なくない。現場の先生方のアクティブラーニングに対する意識や、実践状況について、平塚市の現状をよく知らない。教育委員会では、アクティブラーニングの展開に関して、何かガイドラインなどを策定しているのか。また、相模小学校においても、そのような点を想定しているのか。
＜事務局＞
そのような議論はしており、職員会議等で情報を共有しているが、平塚市全体で推進しているというよりは、各学校が個別に取り組んでおり、その事例を横展開している。相模小学校では、透明なガラスの壁や広い空間、開かれた図書館が整備されていることから、子どもたちが教え合ったりできる環境が整っている。
＜委員長＞
プロポーザルの審査では、設計者のアクティブラーニングに対する理解度が重要な評価基準となる。多様な学習形態を設計段階で適切に考慮できているかどうかが重要である。特に、少人数グループ、個別学習、全体学習など、多様な学習形態に対応できる施設設計が求められる。従来の教育施

設は、壁を取り払うだけでは不十分で、多様な学習集団形態と学習展開を可能にする設計が必要となる。平塚市では、従来の横並び意識からの脱却を図り、共創空間の新たな取組として、アクティブラーニングを教育現場で展開できる可能性がある。特に、地域連携による事業展開の可能性を感じる。相模小学校の事例を紹介することも良いが、３つの特色を挙げる必要がある。

＜事務局＞
第３章「適正規模・適正配置の考え方」のうち、16 ページ以降について、説明した。
＜委員＞
不動産関係者など、知っている人も多いが、不動産の表示における距離と時間の表記については、実際と乖離している。ただ一方で、これしか基準がない。小学校１年生の歩く速さを考慮すると、この基準で考えて良いのかという点は指摘したい。
＜委員長＞
文部科学省の基準のほか、様々な距離・時間の指針があるが、実際より短めであるとのことだった。直線距離と実際の距離もあり、ルート２で割るという方法もあるのだろうか。事務局から補足事項はあるか。
＜事務局＞
お示しした事務局案は、アンケート結果に基づいているが、国の基準を上回ったり下回ったりしている。この先、児童・生徒数が減少することが見込まれる中、学級数と通学時間・距離を国の基準に合わせるべきかどうかを悩んでおり、ご意見をいただきたい。
＜委員長＞
将来的に学校が再編されると通学距離が延びるなど、将来的に起こりうることを含めては、どう考えるか。
＜委員＞
小学校１年生でもすごく早く歩ける子もいるし、時間がかかる子もいる。道のりに日影があるのかどうかということも考える必要がある。１時間というのは小学生では厳しく、30 分というのが無難と考える。
＜委員長＞
アンケートの結果をそのまま出しているが、さらに分析する考えはあるのか。
＜事務局＞
今年度に関しては、ここまでだと考えている。第４章に関わるが、来年度以降の実施計画の策定に向けては、より詳細に学校ごとに分析する必要があると考えている。
＜委員＞
基準を設定すると、これが独り歩きする怖さがある。地域にとっても、子どもたちにとっても困る可能性があるため、地域の実情に応じて検討するなど、ただし書きを入れた方が良い。第４章に記載がある検討対象校や優先検討校になったときには、ちゃんとした調査が必要で、やはり安全が守られているのか守られないのか検討すると思うので、一文があると良い。
＜委員長＞
このような数値が独り歩きしたり、基準になってしまうので、将来のことも含めて調整或いは修正の可能性みたいな内容を書いておくのだろう。

＜委員＞
学級数よりも通学時間が、平塚市が一番大切にしている安全・安心なまちづくりの根本であるので、そこは入れておいた方が良い。
＜委員＞
トータルで掛け算だと思う。小田原市は４つのことを掛け算していて、距離は仕方ないので長くても良い、短くても良いという議論をしている。４つでも３つでも方針を明確化して、全部の基準をクリアすることは無理なので、基準が変わる可能性も書いておく必要がある。地域の状況、保護者の意見なども含め、全体最適を考慮した方針を立て、各要素への影響を検討する必要がある。特定の要素に偏ってしまう可能性があることを懸念している。
＜委員＞
来年度以降、会議を衣替えしていくと思うが、その時に具体的なところを議論するという認識で合っているか。それとも、ここに書いたものが方針となるのか。
＜事務局＞
この検討委員会でもっと伸ばすべきではないか、クラス数はこうではないかといった議論をしていただき、基本方針に落とし込んでいきたい。
＜委員＞
この会議で決めるということであれば、もっと突っ込んだ議論が必要か。
＜委員＞
クラス数、距離、時間といった数値目標を個別に設定するのではなく、それらと「地域との関係」といったより大きな方針をバランス良く考慮する必要がある。数値目標に焦点が当たりすぎているが、それらと全体のバランスを考慮した上で、より大きな方針を示す必要がある。国の方針やアンケート結果を基準とするのではなく、それらを目安として、全体最適の観点からバランスを取っていく必要があり、平塚市の基準が数値目標だけに偏っていることを懸念している。
＜事務局＞
16 ページを「望ましい学級数の基準」、17 ページを「通学時間・距離の範囲」というタイトルにしているが、ご意見のとおり１つの目安だと思う。ある程度の目安を設けないと、次の段階で検討対象校を抽出するとか、来年度以降の実施計画の議論に進んでいけないという考えが事務局にあるので、１つの目安を作りたいと考えている。また、この後、第４章を説明する予定だが、19 ページ「４基本方針等の見直し」に記載のとおり、様々な状況の変化に応じて見直すということを考えている。一旦数字が出ると独り歩きしてしまう懸念も認識しているが、一定の目安をこの会議で作っていただきたいと事務局では考えている。
＜委員長＞
基準ではなく目安だとニュアンスが違うのか。基準というとかなりガチっとしており、目安という表現の方がいいのかなと思う。16、17 ページ黒丸のついたところは、この委員会として数値を承認しますって形でまとめるということか。
＜事務局＞
はい。
＜委員長＞
委員会として、これが答申した数値ですということで、皆で責任を持った数値として認識する必

要がある。そう考えた上で、黒丸のところには、どのような数値を入るか。
＜委員＞
この通学時間は、徒歩通学のことか。徒歩でないと 30 分以内に収まらない場合は、バスで送迎も考えられると思うが、そういうものも含めた時間の目安となるか。
＜事務局＞
アンケートの回答は、徒歩が大多数だが、自転車やバス通学という回答もあった。この結果を基に算出しており、先々色んな通学手段を検討する可能性もあることから、徒歩に限らない時間と考えている。
＜委員長＞
何キロ又は何分以内といった感じか。
＜事務局＞
そのように捉えている。
＜委員長＞
ここの数値に関しては、パブリックコメントの時には数字入れて出すことになる。
＜委員＞
アンケートだが、地域の人と保護者に印象を聞いたもので、回答率が３割程度のアンケート結果を平塚市の基準として、検討委員会が責任を持つというのはどうなのだろうか。より詳細な情報を伝えて、様々な関係者からの意見や情報を収集する必要がある。
また、学校の適正規模を考えたときに、学級数だけでなく、１学級あたりの生徒数も重要な要素である。１クラス 35 人で１人増えて２クラスになると、１クラスの人数が 18 人となる。この方が子どもたちに関われるし、学年のバランスも取れる。
第４章の検討において検討する基準がこの学級数や通学距離・時間となることを考えると、ここは大きなポイントとなる。
＜委員＞
今、クラスの数だけを見ているが、この第３章はずっと議論してきた基本的な考え方がここにあることから、この物的な意味での目安だけでなく、この基本的な考え方も目安になる。この検討委員会としては合わせ読みするということだろう。例えば、８クラスになった中学校はすぐに統合するということではなく、基本的な考え方を踏まえたときに、それは地域とよく協議をしてください、といった運び、理解となるのか。そういうことをオールパッケージで知らしめていくことが大事だと思う。
＜委員＞
このことだけに特化していると読み間違いのないようなまとめ方にしていただきたい。
＜委員長＞
検討委員会として答申する形になることから、この数値に意識を集中してもらったが、実施計画に向けては、変更となる余地を残しておくというのもある。一方で、なぜこの数値が出てきたのか問われたときに、説明できる責任も必要だと思う。他の自治体では、最低人数を決めて、それ以下にしないということを自治体のオリジナルで決めているところもあるが、平塚市の実態はどうか。
＜事務局＞
35 人ちょうどにしている。特別支援学級の子がいると、36 人を超えるクラスもあるが、基本的に

36 人になったら、２クラスに分かれる。
＜委員＞
先ほど事務局からアンケート結果だけを根拠に、24 学級としてよいかという問題提起があった。このアンケート結果だけで決めずにちゃんと考える必要があり、国の基準に合わせるという考えもある。また、ここには特別支援学級が入っていない。特別支援学級が増えている状況なので、教室数の問題があるが、そこを踏まえなくてよいのか気になる。先ほどの共創の学校では、個別指導に必要な教室などで結構使っていることを見た方が良い。アンケート結果も参考に、教育委員会と検討委員会で、この数値の根拠を明確に示すことができると納得できるものになる。特別支援学級が増えている状況があると、24 学級にしたいが、国の基準で見ていきたいという考え方もある。
また、11 学級以下の小規模校では、児童・生徒数をクラス数で割った平均児童・生徒数が、24 学級以上の大規模校と比べて明らかに少なくなるように、学校規模によって教育の格差が生じている。大規模校では 40 人に近い人数となり、教員の負担が大きくなる一方、小規模校では生徒数が少なく、教育の格差がある。こういうことを考えていくと、あまり広げるのはどうかという気がする。
＜委員長＞
平塚市の特別支援学級は、各学校で最大どのくらいか。
＜委員＞
６，７クラスの学校もある。
＜委員長＞
特別支援学級が増えているということだが、それに対する将来推計はどうか。
＜事務局＞
子どもたちも増えているし、学級数も増え続けている。
＜委員長＞
特別支援学級の教室面積は、普通教室の面積より大きいと記憶している。７クラス程度の新設特別支援学級では、補助基準面積を満たしていない可能性もある。
＜委員＞
国の基準に対して、平塚市は裏付けを取った中で、これを１つの目安として考えるというスタンスかなと思う。第３章の考え方をしっかりとまとめて、さっきの数字を修正するという目安になる。この考え方で共感したのかと取られる方が怖く、皆で議論して共感できるものにするための会議だと思っている。アンケートを議論する場ではなく、１つの目安の裏付けとしてアンケートを実施して、参考とするということで良い。平塚市の一番の基準はこれだということをここで打ち出すための議論をした方が良い。来年の組織に向けた流れを作っておかないと蒸し返すことになってしまう。
＜委員長＞
学級数と通学距離の数値について、資料１では「検討委員会の議論を踏まえて、望ましい学級数の範囲を次のとおりとします」としており、この文章に対して検討委員会として責任を持つ必要があると考えて問題提起をした。このとおりにまとめるのであれば、この形で数値がパブコメで公開されることになる。
＜事務局＞
冒頭でご意見いただいた中にもあったとおり、この基本方針そのものが、検討委員会の意見を聞いて作るという旨を、次回に向けて修正するよう検討するので、あえてここで学級数や通学距離の

書き出しに検討委員会の議論を踏まえてと書く必要はないと考える。他市の例も見ても検討委員会の議論を踏まえてという断り書きをしているところもないので、基本方針の最初の方に、検討委員会の議論を経て作られたものと書く方向で調整し、タイトルも含めて次回に向けて調整する。
＜委員長＞
学級数の基準ではなく目安にするという意見もあったので、やわらかく弾力的に修正してもらうということだろう。
＜事務局＞
先ほど、検討委員会で決まった目安を黒丸に入れると答えたが、答申の形は今後決定する。基本方針そのものを答申とすることもあれば、箇条書きで考え方や文言修正を答申していただき、教育委員会で修正したうえで策定する方法もある。
＜委員長＞
次のとおりとします、という強いメッセージから変更するということだろう。
＜委員＞
普通学級と特別支援学級のクラス数の推移を見ると、令和 7 年度で通常級が 385、特別支援学級は 114 となっており、望ましい学級数の基準を設けるにあたって特別支援学級は大きい。また、小学校で 12 学級から 24 学級という数字を 5 年後の平塚市の学級数と照らし合わせると、小規模が 10 校となるが、対象となる学校数がかなり多い印象があり、平塚市の現状、今後を考えると少ない学級数も入れてかないと対象校がすごく増えてしまう。ここに当てはまらない学校が５年後で 10 校あることを考えると、この数字を置いて良いのだろうか。
＜委員＞
今の意見については議論が必要だが、人間関係に困ったときにクラス替えができるという点で、12 学級というのは１学年２学級が必要だという議論でもあった。
＜委員長＞
望ましいという書き出しなので、９学級が望ましいというのは微妙なのかもしれない。
＜委員＞
実施計画の時には、もう合わないということも結構あるので、含みを入れておいた方が良い。
＜委員＞
中身は専門ではないので構成を考えていると、16 ページ「３　望ましい学級数の基準」と 17 ページ「４　望ましい通学時間・距離」について、根拠は議論しているものの、数字が生々しく、本当に大丈夫なのだろうかという懸念がある。改めて国が決めた方針と、実はそんなに変わらないという落ち着きどころもあり、事務局では基準が欲しいという状況もある。事務局案を当てはめても、文部科学省の基準を当てはめても、そんなに変な数字ではないと思う。大事なのは、これを望ましい範囲や基準ではなく、目安とすると書いたうえで、留意すべき注意事項やただし書きで、配慮が必要な児童・生徒、教職員の配置、クラス替えができた方が良いといった専門の見地からの要素を入れたらどうか。そのうえで平塚らしい教育ができる範囲として、持続可能な学級数など、将来に向けてやれる範囲を定める。このただし書きには、12 ページ「１　基本的な考え方」の３つの視点が反映されていると良い。14 ページ「２　望ましい共創空間」については、平塚らしい教育として実際に実施していることを出すのか、地域で実施しているベストプラクティスみたいなものを入れたうえで、学級数や配置が決まっていき、次の委員会で決めるような流れができるとすっきりすると

思う。
＜委員＞
小田原市は数値が少ししか入っていない。アンケートのどういう学校が良いかということと１校当たりの費用が明確に書いてある。ただクラスの人数や距離を明確にするよりも前半の部分を大事にして決めていき、児童数や予算を合わせて考えて、学校規模が決まる。
＜委員＞
16、17 ページで１ページずつ使っていることにインパクトがある。12、13 ページを膨らませて、３つの視点を踏まえたうえで、最後に目安となる学級数と通学時間をまとめるという流れはどうか。３つの視点について、「（１）児童・生徒最優先の視点」では、安全や教育の質、複数クラスも１つの考え方として追加し、「（３）公共施設の最適化の視点」も例を文章で少し入れて膨らませて、３つの視点と合わせた具体例として「２　望ましい共創空間」にもっていくとイメージしやすくなる。また 16、17 ページをちょっと小さいページにまとめていったらどうか。
＜委員長＞
この数字はここで確定しなければならないものか。
＜事務局＞
パブリックコメントを 11 月に予定しているが、10 月９日（木）に第５回検討委員会を予定しているので、まだ議論できる。
＜委員長＞
第２章、第３章について、問題提起を含めてリライトした方が良いとの意見があった。第３章の望ましい学級数、通学時間・距離の目安については、第３章の冒頭を膨らませつつ、望ましい共創空間についても提言があったように、平塚らしい教育みたいな話で展開するよう事務局で修正したらどうか。

＜事務局＞
第４章「今後の検討」について、説明した。
＜委員長＞
検討対象校や優先検討校がわかりにくいという意見もあったが、特に優先検討校とは、基準が決まったときに、それを下回る学校、或いは上回る学校とか、老朽化が著しい学校が特別に検討すべき学校になるというそういうニュアンスでよいか。そうすると先ほど意見のあった規模を割り込んでしまう 10 校ぐらいの学校が、将来的にはこの優先対象学校なる可能性と認識してよいか。
＜事務局＞
先ほどご意見のあった 12 学級を下回る 10 校については、まず「（１）検討対象校」に入ってくるイメージである。そのうえで、10 校の中でも特に小規模化の進行が顕著であるとか、校舎の状況など、色々な状況を総合的に勘案して、特に優先して検討するべき学校を 10 校から絞り込むと「（２）優先検討校」が選定されていくイメージである。
＜委員＞
例えばここには、優先検討校を選定しますとあるが、その後、また次のときに提案していくイメージか。今の段階では選定するまでで、その後の流れとして関係する学校、地域でまた会議をもって検討をしていくことで良いか。

＜事務局＞
20 ページのイメージのとおり、優先検討校として選定された地域では、現時点での想定として、地域との協議をして、地域の合意を経たうえで進めていくイメージである。優先検討校になったらなくなってしまうとか、強引に進めるということではないことをイメージで示している。
＜委員＞
現時点では、地域とも話をして、対応を進めていく方向で考えているということで、何か具体的なことはまだ出ていないということで、イメージとしては分かった。
＜事務局＞
10 年、20 年よりもっと先になった時に、作ってなかったのでどうしよう、とならないように今から策定を目指している。
＜委員長＞
取組事例の中に小中連携教育があるが、小中一貫はここに入っていない。
＜事務局＞
小中連携教育が一番大きな概念で、その中に小中一貫も含まれていると認識している。
＜委員長＞
この検討課題が少しわかりにくい。目の前の課題が抽出されるが、はっきりせずふわふわ浮いているような課題も色々とあるような感じがする。課題そのものが、主な取組事例だと思うが、その他の起こってくる現象、課題に対して、何かダイヤグラムみたいなもので、どこかに記載されていると良いと個人的に思ったが、皆さんはこの辺りをイメージできるか。
＜委員＞
ようやくここまで来たなっていう気がしている。一番根幹は、第３章の３つの視点だと思うので、第３章がとても大切で、ここにすごく集約されていると思うので、やっぱり３つの視点をしっかり押さえないといけない。そうしないと足元がぶれるし、地域を混乱させてしまう気がする。検討対象校とか優先検討校はしっかりお知らせして、地域としても課題として持ってもらわなければならないということは事実だと思うので、ここまで来たなというふうに思う。
＜委員＞
18 ページの検討対象校、優先検討校までは分かったが、これと並ぶ具体的な取組事例が置いてあるのが分かりにくい。検討対象校があってその中から優先校選ぶ、それと具体的な取組事例がどう結びついていくのかわからない。これで何をしようとしているのか、時系列なのか、並んで何かやることとか、どういう意図なのか。
＜委員長＞
ここのフローチャートは時系列のようだが、実は同時に検討すべきで、常に検討すべきものが横にあるような感じではないか。先ほどのしっかり見えている課題とふわふわ浮いている課題と色々あるかもしれない。だから時系列で具体的な取組の実施ではなく、ちょっとこれとは違うフローになるという感じがするが、いかがか。
＜事務局＞
イメージしているのは、（１）（２）と順番にきて、優先検討校となった学校に対して、その状況、課題を解消するために、（３）に挙げた取組の実施を検討する。優先検討校でどういう取組をしていくべきか、その具体例として（３）を挙げているので、イメージは時系列である。

＜委員＞
タイトルを来年度以降の流れとかに変えた方が良いのではないか。今後の検討とあるが、この会議で検討するふうに思えてしまうところもあるし、フローをよく見たら来年度以降って書いてある。来年度以降、新しく考えていくことが必要ですという今後のスケジュール案という意味合いだと思う。実際に取組を実施したら、２、３年後かもしれないわけで、ここでの検討というのは、今検討するのか、３年後に検討するのか。実際に来年か再来年に、検討対象校が現れたときにどれを使うかは、その時に考えるというか、対象になった学校に適した取組を考えるのではないか。
＜事務局＞
具体的にどうするかは、来年度以降の実施計画の策定に向けてと捉えており、そこでの取組なのか手法なのか、書き方は様々ご意見をいただいているが、来年検討する取組事例としては、こういうことが考えられるということを記載している。
＜委員＞
流れが違い、迷路にはまり込んでいる気がする。
＜委員長＞
優先検討校で検討された後のイメージになっているが、常に検討するべきものではないか。そうすると最後のイメージ図はどうなのか。もう少しフロー図を検討した方が良い。
＜事務局＞
検討する上で常に意識していくものなので、ここの並びは再検討する。
＜委員長＞
具体的な取組事例が６つ挙げられているが、これで良いか。抜けがないか意見を伺う。
＜委員＞
１つの例として、こういうことだと分かるのは良いが、実際にはあらゆることが入ってくるのでこんなに簡単なものではない。しかし、これ以上入れるのは無理なので、一般の市民の方々に示すものとしては良いと思う。ただ、今後の新たな検討委員会がどういう人達の集まりなのか分からないが、教育委員会に縁がない人たちが具体的に話を進めるときに、教育の専門家ではない人たちが言えるのかどうかは気になる。
＜委員＞
教育現場だけでなく、自治会長や産官学連携といった幅広い視点を取り入れる必要がある。都市政策や施設など、平塚市の全資源を使って教育施設を作っていくべきである。現状では教育現場のみに偏っており、他の分野の意見が欠落している可能性がある。ここまである程度しぼれたので、それぞれの分野で地域のこと、産業のことなど色々なことが入ってくることを含めて考えた方が良い。３つの視点を踏まえるということが出たが、次回までに事務局の方で出すということでよいのか。その部分がウエイトの大きいところ、核心になってくると思うので、他市の例もいれながら、平塚市としてどうまとめるかということが一番大事である。そういう視点が入るためには、次回のこの協議会にそういう関係者が入っていないと漏れる。そういうところが非常に大事なテーマでメンバーも決まってくるし、来年以降素晴らしい展開ができるかなと思う。
＜委員＞
事務局が作業する上で、この検討委員会で解決できる部分があれば、改めて話した方が良いと思うがいかがか。

＜事務局＞
　先ほどの学級数について、特別支援学級が 500 のうち 100 強位あり、大きな割合を占めるという認識は持っているが、これを将来の望ましい学級数に示していくのは予測が難しいと捉えている。他市の事例も当たっているが、そこについては触れられているところがない状況のため、学級数を表すときには、通常学級に限定させてもらいたい。
＜委員＞
　特別支援学級に関わる保護者の方々から、ここから抜けているのではないかというご指摘をもらう可能性があるので、一部入れておく必要がある気がしている。
＜委員＞
　先ほど出ていた教室数に大きく影響を受けるので、やっぱり支援教育が抜けないように、人数と教室を常に一緒に考えて、その数には入らないけれども、一緒に考えていけるような形で、読みやすい資料になると良い。
＜事務局＞
　表現方法は検討する。
＜委員長＞
　特別支援学級においては、遮音性のある落ち着ける空間や多様な学習コーナーなど、通常学級にはない特別な配慮が必要である。しかし、現在の文部科学省の施設基準は、多様なニーズを反映しておらず、面積不足や設備不足といった問題を抱えている。文部科学省の補助基準も、現状に合致していない可能性がある。

６　その他

・次回の第５回検討委員会の予定　10 月９日（木）１３時３０分開催 ※平塚市美術館

７　閉会